アメリカと私

江藤 淳

講談社

アメリカと私

江藤 淳

講談社

アメリカと私

定価540円

昭和44年5月16日　第1刷発行
昭和45年4月4日　第2刷発行

著　者　江藤　淳
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号　112
電話(942)1111(大代表)
振替東京　3930
装幀者　栃折久美子

印刷所　慶昌堂印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。　©Jun Etô 1965
Printed in Japan

1395-120340-2253（0）

新版への序

昨年の秋、米国に出かけたとき、私は四年ぶりでプリンストンに行ってみた。それはいわくいいがたい体験であった。人と場所に対するなつかしさがなかったわけではない。しかし私は、むしろ記憶の中から次々に浮びあがって来る当時のなまなましい生活感情を、もてあつかいかねていた。一番の衝撃は、当時の私が、自分の心に刻みつけられたさまざまな傷を、ほとんど意識せずにすごしていたという発見であった。私は若かったのかも知れず、それほどむきになっていたのかも知れない。いずれにせよ、プリンストンでの二年間は、今からもう一度やり直すというわけにはいかない種類の経験であったように思われる。

この本を読んで、怒ったり口惜しがったりしたアメリカ人もいたらしい。そういう反応が理解できないというのではないが、自分の気持を潤色してまで外交辞令を弄するわけにはいかないのでいたしかたがない。しかしその一方では、この本を読んでかえって心が近づいたというアメリカ人もいた。そういう人々は国籍にかかわらず私の友人であったし、今でもそうでありつづけている。

だが私にとってなによりもよろこばしいことは、留学生諸君から、この本によって勇気づけられたというような感想をしばしば聞いたことである。当然私はこの本を日本の読者のために

書いた。別に留学案内を意図したわけではないが、羊のような留学生を一人でも減らしたいとひそかに願ったことは否定しない。そういう本が現になにかの効用を持ち得ているとすれば、著者たる私は以て冥すべきであろう。

最初朝日新聞社から出版されたこの本を〝名著シリーズ〟に収録するについては、講談社文芸局の斎藤稔氏と松本道子さんのお世話になった。記して深く謝意を表したい。

一九六九年三月七日

江藤　淳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目
次

新版への序

I アメリカと私

適者生存 11
プリンストン 27
大学 41
城 57
パーティー 73
東と西 87
普林亭主人 102
学生たち 116
事件 131
別れ 147

Ⅱ アメリカ通信

第一信 167
十月二十八日の午後 176
キューバ危機の中で 182
〝不安な巨人〟日本について 186
生きている〝古さ〟 195
合衆国と地方主義 199
深い南北の溝 209
冬と春の間 213
青春と狂気 223
海老原喜之助の回顧展 233
私の見たアメリカ 240
ケネディ以後 249

エリート 255
アメリカの古い顔 261
国家・個人・言葉 270
米国から欧州へ 281
学問の自由化 291
初版へのあとがき 300
口絵写真＝著者撮影

アメリカと私

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

アメリカと私

適者生存

あるとき、米国人の友人がいった。

「外国暮しの『安全圏』も一年までだね。一年だとすぐもとの生活に戻れるが、二年いると自分のなかのなにかが確実に変ってしまう。ぼくは近ごろ周囲の連中と調子が合わなくなって困っている」

彼は当時まさに二年半ぶりで日本から帰って来たところであった。私のほうはといえば、プリンストンに居を定めて、まだ二ヵ月とたっていなかった。ニューヘヴンの郊外に住むこの友人と、ニューヨークの下町のホテルでおちあい、お互いに細君同伴でグリニッチ・ヴィレジに晩飯を食いに行ったときの話である。この言葉は、その後も妙に記憶に残っていて、折りにふれて私は彼のテレたような、居直ったような、さびしそうなところがなくもない語調を思い出した。そして、それから二年後に帰京したいま、私は、そのときの彼の言葉が、あらためて身内になまなましくよみがえって来るのを感じている。当時の彼が味わっていたのと同様の間尺にあわぬ思いを、おそらく現在の私もまた経験しつつあるからである。

異質な文化のなかで、少し長い間暮していると、人間のなにがどう変るのかは、一口にはい

えない。ふりかえって思えば、私がことさらアメリカ式の生活をしていたわけではない。私は単に自分の身にあった暮しかたをしようとつとめ、ある程度までそれができたと思うだけである。身にあった暮しとは、好きな人間とつきあい、きらいな人間とはつきあわず、余事にわずらわされずに、出来るだけ多くの時間を興味のある仕事にさく、という暮しかたである。私は米国に行く前にもそうしていた。「していた」といって悪ければ、懸命にそうしようとしていた。同様のことが、実はプリンストンでも繰返されたにすぎない。それが「生活」というものであって、人間に首があるようにおのおのの「生活」にも首があり、それは二年やそこら外国に住んだぐらいですげかえのきくものではない。そういう旧弊な思想の、私はいまだに信奉者である。

したがって、私のなかのなにかが変ったとすれば、それは私の「生活」が——あるいは身にあった暮しかたが——一変したからではない。逆に、それがどうにも変えようがなかったからである。異質の文化のなかで、自分の同一性（アイデンティティ）を保とうとすれば、かならず異質の手つづきが必要になる。その手つづきが、おそらく私のなにかを微妙に、しかしかなり確実に変えたであろう。そのことを、私は米国ですでに感じ、三年ぶりに訪れた欧州で感じ、さらに帰って来た東京で一層強く感じた。もとより東京そのものも、しばらく見ぬ間に驚くべき変貌をとげていた。しかし、そのことについては、あらためて別に書く機会もあるだろう。

自己の同一性を保つために、異質の手つづきを習得するというのは、至極厄介な仕事である。が、厄介だといっておりてしまえば、それは米国にいる間「生活」からおりていることを

意味する。もし私が、ある種の日本の幸福な若手学者たちのように、しばしの米国滞在を、自動車が持てて「外人」とつきあえる長い休暇だと観念していたら、いっそ気が楽だったに違いない。しかし、私には、そうするためには人生はあまりに短かすぎるように思えた。日本も米国も、ともに戦後の「進歩的」思想家の愚痴の対象にしておくには、豊富な問題をはらむ国でありすぎるように見えた。さらに、おりるのがきらいな私には、「海外生活」というキラキラした舞台にのぼる役まわりも気に入らなかった。「何でも見てやろう」というおりた観察者の姿勢に無理があるように、「いつでも眺められている」という自意識に縛られた演技者のポーズも不自由なものである。それらはふたつながら平常心を欠いている。「生活」というものが、ひっきょう見たり見られたりという戦いの連続である以上——しかもだれもとくに意識してそうしているのではない以上、見る一方、あるいは見られる一方という外国生活が、健康なものだという理由はないのである。

そういう暮しかたをとにかく二年間つづけて来たにもかかわらず——あるいはそのために——、私は、いま自分のうちのなにかが変ったと感じている。それは、どんな親しい友人ともわかち持てない一部分が、自分のなかに出来てしまったような感覚である。この部分は、時が経過するにつれてなくなってしまうかも知れない。あるいはいつまでもなくならずにいるかも知れない。私と同じ年ごろに西洋から帰って来た永井荷風が、『監獄署の裏』で、「閣下よ、私は淋しい……」と絶句したとき身内に覚えていたのは、私のそれに似たものではなかったろうか。あるいは、森鷗外の『かのやうに』の主人公五条秀麿が、「附合に物を言っている」よう

な男になり変って帰朝したのも、つまりはあのなにかのせいではなかったろうか。

爾来半世紀の歳月が流れ、荷風が『監獄署の裏』に描いた旧い貧しい東京は、高速道路の四通した第二のロサンゼルスのような巨大な近代都市に変容しつつある。これはまさしくめざましい「近代化」だ。しかし決して「西洋化」ではない。そうでないことを、二年ぶりで西洋から帰って来た私は、自分の肌に感じている。そして、そういう感覚がいまだに帰朝者にとってひとつの現実である以上、荷風や鷗外の「淋しさ」や「諦め」の誘惑が、異質の文化に自分の内部をさらした者の心に忍び入ることは、避けられない。これは、もとより彼我の文化が同質ではなく、その相違が単なる量の相違に還元出来ぬ性質のものだからである。

このことを私はしかし「附合い」でいうのではない。自分のなかに、親しい友人とさえ容易にわかち持てぬなにかがあると感じるからこそ、私はそれについて書かなければならない。それは、大きくいえば「外の世界」を経験して来た日本人に伝統的に課せられている義務であり、小さくいえば私一個の必要のためである。いずれにせよ、私は、いまあらためて「自己の同一性を保つために、異質の手つづきを習得する」段階にさしかかっている。どうやら私は、かつて空気のように自然なものと感じていた日本の社会をどこか「異質」と感じるほど深く米国の社会につかってしまっていたらしい。もちろんそうなるまでにはかなりの時間がかかった。私が、米国の新しい環境で、もとの自分をとり戻すまでにすら、「生活」が気化して行くような、あるいは自分の存在意義が無限に縮小して行くような、短いがかなり深い混乱の時期があった。まず、そのころのことから書きはじめようと思う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com